

集団コラージュにおけるコラージュ表現の系 列的变化(臨床心理学専攻, 修士論文要旨 (2005年度修了者))

石井, 知香

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

282

(終了ページ / End Page)

282

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020752>

不安・抑うつ不安を感じる事が少なかったため、移行対象を必要としなかった場合（濃密群）と、そもそもほど良い母子関係が存在しなかった場合（希薄群）の2つに分類して検討する。さらに、移行対象に選ばれた所有物のタイプ（1次的移行対象・2次的移行対象）の違いと自己愛傾向との関連、移行対象の放棄方法と自己愛傾向との関連について明らかにすることも併せて目的とする。

加えて、自己愛傾向を測定するにあたって使用する自己愛パーソナリティ目録（Narcissistic Personality Inventory：NPI）の因子分析を行い、新たに因子を抽出することも目的とした。それから、性別と自己愛傾向に関しては、有意な性差を報告している研究結果（浅川ら、2002；佐方、1986）もあるが、有意な性差が見出されなかった研究もある（大石、1989）。それらを踏まえ、本研究においては性差が見られるかどうか検討する。

【方法】

調査対象者は、東京都内の大学に通う大学生182名で、有効回答はその内の173名（男性51名、女性122名）から得られた。質問紙は、（1）就学前の母子関係尺度（酒井、2001）、（2）移行対象に関する質問、（3）NPI（佐方、1986）を用いた。

【結果と考察】

NPIの因子分析の結果、「優越性・指導性・対人影響力」、「自己顕示・自己耽溺」、「利己性」の3因子が抽出された。また、本研究の結果によれば、NPI得点には一貫して有意な性差が認められ、いずれも男性の得点が女性の得点を上回っていた。自己愛傾向に関する性差について、浅川ら（2002）が、NPIの内容が藤森ら（1992）のいう社会的に求められている青年期の男性役割と類似した内容であることから、男性が相対的に高得点を示したと述べていて、そのことが本研究の結果にも関連しているものと思われる。

そして、移行対象の認識の2分類とNPIの下位尺度において、関連が認められたのは移行対象の認知（全サンプル）における利己性のみであった。この結果により、移行対象の記憶の有無よりも移行対象の認知の有無の方がより重要であることが示された。さらに、移行対象がありそれを認知している者は、就学前の母子関係が濃密で移行対象を持たなかった者よりも、青年期において利己性傾向が低い傾向が見られた。このことは、移行対象が必要ない程に母子関係が濃密である場合には、母親は子どもの要求を常に満たしてくれ、子どもによっては本来ならば幼児期に脱却すべき万能感から十分に抜け出せずに成長するかもしれない、それによって、利己性・自己中心性が持続し、青年期において利己性傾向が高くなることを示唆していると考えられる。加えて、本研究では、移行対象のタイプ／放棄方法と自己愛傾向には関連が認められなかった。

それから、本研究は回顧的研究であるため、その研究内容の質には自ずと限界が存在する。したがって、今後は乳幼児の直接観察、養育者等へのインタビュー、及び追跡調査などが有効であると思われる。また、本研究ではサンプル数が少なく、男女のサンプル数の偏り（女性のサンプル数が圧倒的に多かった）もあったため、今後は全体的にサンプル数を増やし、男女のサンプル数も極力均等になるようにして調査を実施することが必要であろう。総じて、本研究によって得られた結果は興味深いものであったが、考察を行うにあたっては、まだまだ関連する先行研究が少なく、推測の域を脱していないため、今後のさらなる研究が求められる。

<臨床心理学専攻>

集団コラージュにおけるコラージュ表現の系列的变化

石井知香

個人を対象にした精神療法として誕生したコラージュ療法であるが、近年臨床の場のみならず、医療・看護・福祉・司法・教育・産業などの様々な分野で、グループを対象にして、グループワークやコミュニケーションの手がかり、自己啓発技法として用いられ、様々な効果の可能性や能力開発に効果的であるということが報告されている。

本来コラージュ療法は、面接場面の中で、クライアントがうまく表現できないこと、うまく言葉にならないことを理解するためにコラージュを導入するのであるのに、今までの集団コラージュ研究では、コラージュ療法本来の持ち味である作品の系列的变化やグループ力動が流れる中で個人の、そしてグループの変化については未だ研究がされていない。

そのため本研究では、エンカウンター・グループ・プロセス理論（野島1982）を取り入れ、10回のコラージュ制作とシェアリングを行い、その中で起きた個人の変化や集団力動が流れる中ででの集団の形成について研究を行った。

今回の研究では、9人で構成された1グループを対象にコラージュ制作と、次に作品を見せながら、自分の作品を発表し、その後自由に話し合うシェアリングを1セッションとして10回、半年間に亘り繰り返し行った。さらに、作品およびシェアリング以外での定量的な変化を捉えるために、1回の制作ごとに性格検査を行った。そして10回の作品終了後、それまでの作品を制作者の手元に返却し、半年間の振り返りをグループ場面で1回と個別面接をメンバー一人に対し1回行った。

その結果、集団コラージュを同じグループに対して継続的に行うことにより、グループ力動は、エンカウンター・グループ・プロセスと似た軌跡をたどることが明らかになった。10回の制作の中で個人は、台紙を通して言葉にはなりにくいことや、頭の中だけで考えていたことが、作品にすることで視覚を使って初めてはっきりと見えてくる。そしてその思いを他者に対して語るという過程を通して、今まで見えていなかった自分の姿が見えてきて、参加者それぞれの形で変化していった。さらにその変化の中には、他者からの影響を受け、また他者にも同じく影響を与えながら変化する様子も明らかになった。また同時に、他者のコラージュを繰り返し見ることによって、他者を理解するという役目も担っており、それらの要素が絡み合いながら、グループ力動も動き出すという、過程が見出された。

作品を作ることで自分に気づき、成長するということはあるが、さらに、人に「見せる」「説明する」という他者とのコミュニケーションの道具としてコラージュを使うことは有益であり、その役割は非常に大きいことがわかった。

加えて、現物がそのまま残るということで、作者自身が、初回からの自分の成長過程を見つめ返し、自己理解を深めることができる。これは言葉のみのやり取りや、箱庭療法からは得られない特長である。今までの作品を始めから見直すことは、1回限りのコラージュでは得られない、達成感や満足感が得られることが確認できた。